
巨人たちの戦争 第2部：対立

伊藤 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨人たちの戦争 第2部：対立

【Nコード】

N9472W

【作者名】

伊藤 薫

【あらすじ】

「ロシア戦役は2週間で勝利したと言っても過言ではない」緒戦の圧倒的な勝利に、楽観した雰囲気に包まれたドイツ軍。しかし、これはまだ序章に過ぎなかった。スモレンスク、キエフ、レニングラード・・・緒戦のショックから徐々に立ち直ったソ連軍は死力を尽くして反撃を開始する。本作は、両軍の作戦行動、指導者・将軍たちの思惑に焦点をあて、「独ソ戦」を克明に再現したノンフィクションである。

1・前哨戦

1941年7月3日、ハルダー参謀総長は日誌にこう記している。
「・・・全体としてビアトリスク屈折部の敵軍は取るに足らない兵力を残して撃滅されたと見ることが出来る。北方軍集団前面で12ないし15個師団が壊滅したものと考えても良からう。南方軍集団前面でも敵軍は友軍の攻撃によって寸断され、大部分は壊滅した。すなわち全体としてみると、ドヴィナ・ドニエプル河前面のソ連軍殲滅の使命は達成されたといえるのである。ロシア戦役は2週間で勝利したと言っても過言ではない」

多くの指揮官がハルダーと同様、対ソ戦の先行きを楽観していたが、中央軍集団司令官ボツク元帥はソ連軍の潜在能力に対して深い懸念を抱いていた。そして、軍集団の内部では、指揮官どうしの軍の運用に関する対立が感情的なものにまで発展しようとしていた。

ドイツ中央軍集団は7月1日の時点で、ミンスクとドニエプル河の中間を流れるベレジナ河の西岸に、3か所の橋頭堡を築いていた。すなわち、ボブルイスクとスヴィスロチ、そしてモスクワ街道上のボリゾフである。

これらの橋頭堡はすべて第2装甲集団が占領しており、その司令官グデーリアン上級大將は第47装甲軍団の全部隊をボリゾフに派遣することによって、その橋頭堡を拡大しようと考えた。だが、第4軍司令官クルーゲ元帥がグデーリアンの出鼻を挫くように、ボリゾフへの前進を禁止する命令を下した（1）。

グデーリアンはしぶしぶ命令を受け入れたが、第17装甲師団（ウェーバー少将）の一部が停止命令を受領せず、ボリゾフへの進撃を継続してしまった。クルーゲはグデーリアンが意図的に命令を無視したと思い込み、グデーリアンを第4軍司令部に呼び出し、厳しい口調で叱責した。

両者の感情的な対立は溝が埋まらないまま、ヒトラーは7月3日

付けで第2・第3装甲集団をクルーゲの直轄指揮下に置くよう命じた。第4軍司令部は「第4装甲軍」としてホトとグデーリアンの両者を統轄する上級司令部となり、第4軍の所属部隊は戦略予備の第2軍（ヴァイクス元帥）に移管された。

この頃になると、ミンスク包囲網で掃討を終えた歩兵部隊と物資を積んだトラックが、先行していた装甲師団に追いつくようになっていた。ヒトラーの決定をグデーリアンは当然ながら苦々しく思っていたが、装甲部隊がドニエプル河への東進が再開できる状態にあり、その怒りも次第に収まっていた。しかし、グデーリアンの正面にはボツクの懸念が的中するかのようになり、ソ連軍の新手の機械化部隊が待ち受けていたのである。

7月3日、第18装甲師団司令部に航空偵察の報告が入った。その内容を読んだ軍団長ネーリング少将は、衝撃を受けた。

「強力な敵戦車部隊。少なくとも100両の重戦車が、ボリソフ＝オルシャ＝スモレンスク街道の両側を前進中。現在、オルシャ。これまで見かけなかった重戦車あり」

ボリソフに出現した「これまで見かけなかった重戦車」とは、すでに北部と南部で姿を現していたT34であった（2）。少数のT34を含む100両以上の戦車を抱える第1モスクワ自動車化狙撃師団（クレイゼル大佐）と第13軍の残存兵から成る機動集団が、ボリソフの橋頭堡を潰そうと反撃に乗り出したのである。しかし、この反撃も戦局を変えるには至らず、2日後には撤退を余儀なくされた。

7月4日、第2装甲集団の南翼を進む第3装甲師団（モーデル中将）はドニエプル河に接するロガチエフに進出し、ドニエプル河の一番乗りを果たした。この知らせを受けたクルーゲは事前に何の相談も無く、部隊を動かす「部下」のグデーリアンへの怒りをさらに募らせる結果となった。

クルーゲとグデーリアンの間に生じた確執は、今後作戦方針をめぐって再燃し、ドイツ中央軍集団全体の動きに影響を与えること

になる(3)。

1・前哨戦（後書き）

（ 1 ） 第2装甲集団は「軍」規模の師団を抱えているが、兵站支援は第4軍に依存していた。そのため、第4軍は第2装甲集団の上級司令部となる。

（ 2 ） T34は中戦車である。

（ 3 ） 両者の対立は1940年の「西方攻勢」のときにも起こっていた。

2・突進

7月4日、ティモシエンコは西部正面軍司令部に姿を現して、自ら2日付けで同軍司令官に就任した（1）。西ドヴィナ河「ドニエプル河」の防衛線に布陣した西部正面軍は戦略予備から第19軍、第20軍、第21軍、第22軍、さらにスモレンスクに構える第16軍が新たに編入された（2）。

しかし、どの部隊も戦車、通信機材、対戦車兵器、高射砲が不足していた。指揮官たちはほとんど毎日、陣地を交代させられた。どの部隊も戦闘準備のために割く時間がなく、バラバラの行動を取るようになった。そのためソ連軍の協同は稚拙だった。

クレムリンはドイツ軍のドニエプル河への進出を阻止するため、ベレジナ河上流のレペリからボリソフを経てボブルイスクに至る線で反撃に出るよう、西部正面軍に命じた。

7月6日、第20軍（クロチュキン中将）は第5・第7機械化軍団を先頭に、レペリ近郊で進撃中のドイツ軍の先鋒に対して正面攻撃を仕掛けた。約2千両の旧式の戦車が投入されたが、ドイツ軍は航空支援を受けながらソ連軍の波状攻勢を撃破していった。5日間にわたる激戦の末、ソ連軍は約830両の戦車を失って東方に撤退した。

この勢いに乗じて、グデーリアンは作戦の第2段階「ドニエプル河の強行渡河に取りかかる」と考えていた。彼は配下の軍団長や師団長と会合を開き、自ら作戦内容を説明して回った。作戦決行日は、7月11日とされた。

7月9日、トロチンに置かれた第2装甲集団司令部に突然、クルーゲが現われた。そして、グデーリアンに対して「ドニエプル河への渡河は延期する」よう命じると、両者の間で激論が戦わされた。包囲下のソ連軍を完全に殲滅しないまま次の攻勢に出ようとするグデーリアンの戦術をクルーゲは「リスクが大きい」と感じており、

より堅実な用兵術を取るよう迫った。一方、グデーリアンは装甲部隊が持つスピードこそが必勝のカギであると考えており、クルーゲに食いついた。

「本官は作戦の成功を信じております。ただちにモスクワへ進めば、本年度じゅうにも勝敗は決します」

グデーリアンの弁舌に気圧されたクルーゲは、「貴官の作戦は常に1本の絹系にかかっている」と言いながらも、予定よりも1日早い即時決行に許可を与えた。グデーリアンは幕僚たちに向かって言った。

「進撃だ、諸君。渡河は明日だ」

7月10日、ドイツ第2装甲集団の先鋒部隊は敵の部隊が少ないスタールイ・ブイホフ、シュクロフ、コプイシの三ヶ所からドニエプル河を渡った。装甲部隊は要塞化されていたオルシャ、モギリヨフ、ロガチエフの脇をすり抜け、モスクワ街道上の2番目の都市スモレンスクへ突進した。

同じ頃、ベシェンコヴィチで西ドヴィナ河を渡った第3装甲集団の第20装甲師団（シュトゥンプ中将）は同河上流の交通の要衝ヴィテブスクを占領した。狂信的な青年共産党員たちが街に火を放ったが、ホトの装甲部隊はそのまま東方へ進撃した。

このようにしてソ連軍の西ドヴィナ河とドニエプル河に沿って構築された防衛線は次々と、各所で突破口が穿たれていったのである。

2 突進（後書き）

（ 1 ） 「 暫定司令官 」 エレメンコは、西部正面軍副司令官に降格された。

（ 2 ） 1941年5月から、第19、22軍は西ドヴィナ河、ドニエプル河の防衛線に配置されていた。第16軍は南西部正面軍から転属され、スモレンスク防衛を命じられていた。

3・綻び

ドイツ第3装甲集団は7月10日の時点で、西ドヴィナ河の両岸に分離されていた。未だ西岸にいる第57装甲軍団は、はるか北方のヴェリキエ・ルーキを占領するよう、中央軍集団司令部から命じられていた。

そこで、ホトはヴィデブスクを占領した第39装甲軍団をスモレンスクの背後に突進させ、ドニエプル河の南から進撃してくるはずの第2装甲集団とスモレンスク東方で連結し、ミンスクと同様の包囲を完成させるという作戦計画を立てた。

このホトの構想は、「バルバロッサ作戦」の第1目標である「白ロシアとドニエプル河以西のウクライナでのソ連軍の殲滅」に基づいたものであったが、グデーリアンとの見解の相違によってその収穫を半減させられてしまうのである。

7月11日、第39装甲軍団はソ連第19軍（コーネフ中将）がヴィデブスク正面に構築した薄い防衛線を突破すると、スモレンスク北方を東へと突進した。ホトの先鋒を務める第7装甲師団（フンク少将）は15日、ドニエプル河付近のヤルツェヴォを占領して、スモレンスク―モスクワ間の自動車道路と鉄道を切断した。

一方、グデーリアンは手持ちの3個装甲軍団（北から第47・第46・第24）をすべてドニエプル河の東岸に進出させた上で、スモレンスクからはるか東方のエリニヤとドロゴブジを占領するよう命じた。この2つの街はドニエプル河の重要な渡河点であり、「赤い首都」モスクワの占領には当然の布石であった。

7月13日、第46装甲軍団はモギリョフ北方を通過し、その南方では第24装甲軍団はスタールイ・ブイホフからドニエプル河を渡った。ソ連第13軍（ゲラシメンコ中将）の第61狙撃軍団（バクーニン少将）と第20機械化軍団（ニキティン少将）がモギリョフで包囲されてしまい、その後2週間にわたって抵抗したが、壊滅

してしまった。

この日の夕刻には、ドイツ第47装甲軍団の第29自動車化歩兵師団（ボルテンシュテルン中将）はモレンスクまであと11マイルの地点に到達した。14日、グデーリアンは大々的に部隊を再編して、第29自動車化歩兵師団に第18装甲師団を支援につけてモレンスクに向かうよう命じた。

モレンスクはモスクワ街道上で2番目に大きな都市である。この街の防衛には、第16軍（ルーキン中将）が担当することになった。市の防衛司令官は西部正面軍司令部から「徹底抗戦」の命令を受けていた。街路にはバリケードや大小のトーチカが築かれ、労働者は武装し、警察や民兵と一緒に市街戦グループに編入された。

市街戦は15日の朝7時に始まり、NKVDや民兵は銃・手榴弾・火炎瓶などで、悪鬼のように闘った。ドイツ軍の歩兵は重砲や火炎放射器で、家を一軒一軒奪っていく他なかった。後のスターリングラードを彷彿させる壮絶な市街戦の後、16日の夜に市のほぼ全域を占領された。

モレンスクとその西方で防御戦を続けるソ連3個軍（第16・第19・第20軍）は新たな包囲網に閉じ込められる危機に直面したが、グデーリアンは東方へ進撃する当初の方針を変えなかった。すなわち、第46装甲軍団の第10装甲師団（シャル中将）とSS自動車化歩兵師団「帝国」（ハウサー中将）を第3装甲集団が占領したヤルツェヴォではなく、エリニャとドロゴブジに差し向けたのである。

4・波状反撃

7月10日、ドイツ中央軍集団がドニエプル河を押し渡った頃、モスクワではクレムリンの戦時指揮本部として「最高司令部」が設立された（1）。「最高司令部」の議長スターリンはドニエプル河の突破とスモレンスクの陥落を受けて、ティモシェンコに情勢を転回させよと厳命した。

グデーリアンが東方のエリニヤとドゴロブジに装甲部隊を送ったことにより、スモレンスクとヤルツェヴォの間には幅50キロの「回廊」が開いていた。ティモシェンコはこの「回廊」を使って包囲されつつある3個軍を救出しようと考え、17日付けで南西部正面軍に所属していたロコソフスキーを西部正面軍へ転属させた。

ロコソフスキーは「回廊」を保持するために、ヤルツェヴォ付近のドイツ第3装甲集団を攻撃せよと命じられた。彼は第38狙撃師団（キリロフ大佐）と第101戦車師団（ミハイロフ大佐）を与えられ、その支援に敗れた各部隊の残兵をかき集めて即席の機動集団を編成した。

7月20日、ドイツ空軍からの間断ない空爆にも関わらず、ロコソフスキーの寄せ集め部隊はヤルツェヴォの奪還を開始した。24日までドイツ第7装甲師団の攻撃を食い止め、25日には反撃に出た。思わぬ反撃に遭遇したドイツ軍は市を放棄して北方へ撤退せざるを得なくなった。

この成功に気を良くしたティモシェンコは、西部正面軍の後方に配置された予備正面軍（第24・第28・第29・第30・第31・第32軍）の中に多数の機動集団を編成して、スモレンスク周辺で突出部を形成していたドイツ中央軍集団の前線のほぼ全周で反撃を命じた（2）。

7月24日から、大急ぎで行われたこのソ連軍の反撃は、広がりすぎたドイツ装甲部隊に絶え間なく圧迫を与えたことにより、大き

な損害を生じさせることになった。だが最後には、ソ連軍の協同と支援砲撃の失敗、資材不足などにより、攻撃は失敗に終わった。

7月24日、「最高司令部」は西部正面軍の担当正面を縮小させるために、ドニエプル河中流の南翼に中央正面軍を設立した。西部正面軍の第3・第21軍が移管され、司令官にはクズネツォフ大将が任命された。

これでスモレンスクの奪回に専念できるようになった西部正面軍司令部は第16軍と第20軍に対し、スモレンスクの奪回を命じた。

7月27日、第16軍はスモレンスクの停車場を奪回し、街の南部に向かって進撃を続けた。しかしその間に、迂回していたドイツ第39・第47装甲軍団はスモレンスク東方で合流を果たしていた。包囲網に再び、3個軍（第16・第19・第20軍）が拘束された。

7月29日、第3装甲集団の第20自動車化歩兵師団（ツォーン少将）と第2装甲集団の第17装甲師団（トーマ中将）が、スモレンスクとドロゴブジのほぼ中間地点でようやく連結した。ティモシエンコは包囲された10個師団に東方への脱出を命じたが、8月4日までに多くの部隊は壊滅した。

7月31日、第24装甲軍団はソ連予備正面軍の攻撃を撃退し、数日以内にこれを壊滅させた。こうしてドイツ中央軍集団に、東方もしくはキエフ防衛中のソ連南西部正面軍北翼への作戦の道が開けたのである。

8月5日、ドイツは「スモレンスク会戦」の終結を公式に発表した。「第4装甲軍」司令部はその役目を終え、それまで第2軍に配属されていた歩兵軍団は、第2軍と第4軍に再分配された（3）。

この戦いでソ連軍は参加兵力の半数を超える約34万人を失い、1348両の戦車と自走砲、9290門の火炮を破壊または鹵獲された。

だが、結果的には失敗に終わってしまったソ連軍の反撃はヒトラーに思わぬ憶測を抱かせることには成功した。特に第2装甲集団の南翼に対して行われた一連の反撃を重大な脅威とみなしたヒトラー

は、「バルバロッサ作戦」の第2段階において、攻撃の主軸を中央戦線から外すことを考えたのである。

4・波状反撃（後書き）

（１）詳しくは後述する。

（２）これらの部隊の中には、NKVDの所属要員によって編成された師団が含まれていた。当時の補充要員よりも、戦術・規律ともに優秀ではあった。

（３）「第４装甲軍」司令官のクルーゲは7月9日から体調を崩して休養を取っていた。その実務は、ほとんど参謀長ブルーメントリット大佐が執っていた。

1・復帰

突然の開戦から6週間が経過していたが、実際にはスモレンスクがドイツ軍に奪われるまで、ソ連軍には政府による強力な統制は存在しなかった。スターリンは白ロシアを奪われたことにショックを受けて、公の場合からも戦争指導の場からも姿を消してしまった。

スターリンがモスクワ郊外の別荘に引き籠もっている間に、ティモシェンコ、ジューコフ、ヴァシレフスキー、ブジヨンヌイ、その他の軍人が緒戦の数日間に各地の司令部を巡回した。

その結果、6月23日にティモシェンコを議長として「総司令部（スタフカGK）」が設立され、その参謀業務は病身のシャポーシニコフがジューコフの代わりに健康の許す限りモスクワで代行し、スターリンから信任された軍の将官たちは司令官もしくは調整官として、政府から危険な地域へのでこ入れを実施するために各地に派遣された。

スターリンが気を取り戻して、本格的にクレムリンに参入したのは、7月1日のことだった。その前日、モスクワ郊外クンツェヴォの別荘にモロトフ外相、ヴォズネセンスキー副首相、ベリヤ内相をはじめとする共産党政治局の幹部が訪れた。

スターリンはこれらの幹部が緒戦の敗戦の責任を取らせようと、自分を逮捕するんじゃないかと疑い、ソファに深く腰掛けたまま身構えた。

「君らは何しに来たのかね？」

「権力を集中して戦争遂行にあたる、新しい機構が必要になります」モロトフが言った。

「だれがそのトップになるべきか？」

「もちろん、あなたがなるべきです」

モロトフの答えにスターリンは内心おどろいたが、次第に気を落ち着いてくると、その要請を快諾した。

7月1日、クレムリンに戦時最高指導部として「国家防衛委員会（GKO）」が設立された。

7月3日、スターリンは国民に向かって初めてラジオ演説を行った。演説の冒頭で「同志諸君、市民のみなさん、兄弟姉妹よ、わが陸海軍の戦士たちよ、私は諸君に訴える、我が友よ」との思いがけない呼び掛けに、ラジオを聴いていた国民は何か異常なものを感じ取った。独裁者はこれまで一度もこのような親密な言葉を発したことが無かった。

さらにスターリンはこの戦争を1812年の戦役にならって「大祖国戦争」と名付け、総力戦への団結を訴えた。

「我が国に迫った危険を一掃するには何が必要か？まず、国民が危機の深さを理解して平和な気分を捨て去らねばならない。我々はいっさいの活動を戦時の体勢に改編しなくてはならない。我々は赤軍に対する全面的な援助を組織し、赤軍が必要とするものすべてを供給し、傷病兵に対する救護組織をつくらねばならない。また、我々は銃後の秩序攪乱者、脱走者、デマを流す者を容赦なく軍法会議にかけなくてはならない。赤軍がやむを得ず退却する場合は、1台の機関車も、1台のトラックも、1キロの穀物も、1リットルの燃料も、1頭の家畜も敵の手に渡してはならない。敵に占領された地域では、破壊活動を行うパルチザンを結成しなくてはならない。我々の総力を上げて、わが英雄的な赤軍、栄光ある赤色海軍を支援せよ！」

7月10日、今まで戦争指導部として機能していた「総司令部」を拡大して「最高司令部（スタフカVK）」が設立された。議長には西部正面軍司令官となったティモシエンコに代わって、スターリンが就任した。

このとき複数の正面軍を統轄するために、3つの新しい戦域司令部を設立された。戦域司令部は北から、それぞれヴォロシロフ（北西戦域。北洋艦隊とバルチック艦隊を含む）、ティモシエンコ（西部戦域）、ブジョヌイ（南西戦域。黒海艦隊を含む）を司令官

にしていた。

これらの戦域司令部には、「評議員」と呼ばれる指揮官や参謀長と同格の政治将校（コミッサール）が配属され、ジダーノフ、ブルガーニン、フルシチョフがそれぞれ任じられた（１）。これはスターリンが赤軍に対して全幅の信頼を置いていなかった表れであり、将軍たちは赤軍政治局長にメフリスが就任したことからもそのことを感じ取った。メフリスは４年前の粛清で大きな役割を果たしていた。

７月１９日、スターリンがティモシェンコに代わって国防人民委員会（国防省）の職務も兼任することが決定された。ついに彼は、ソ連軍の全軍を掌握する最高司令官として戦線の陣頭に立つことになった（２）。

1・復帰（後書き）

（ 1 ） 冷戦時代、「独ソ戦」に関するソ連側の資料はその多くがプロパガンダや脚色が施されていたが、それはフルシチョフの政策に原因がある。

（ 2 ） このときスターリンは共産党書記長、首相も兼務していた。

2・再建

ドイツ陸軍参謀本部は6月21日の時点で、東方外国軍課の情報に基づいてソ連軍の兵力の算定を行っていた。狙撃師団と騎兵師団についてはかなり正確な数を想定していたが、機械化軍団と戦車旅団については実際の3割程度と算出していた。だから、緒戦時にドイツ軍がこれらの部隊に遭遇した時には大きな動揺が走った。

しかし、ドイツ軍の最大の誤りはソ連軍が粉碎された部隊を再編成して、無から新たに兵力を生成する能力を見落としていた点にあった。7月初旬に「独ソ戦」はもう勝利したと考えていたハルダーは、8月11日付けの日記に自分の見解の誤りを認めている。

「すべての状況が、我々が巨人ロシアを過小評価してきたことをますます明らかにしてきている。ソ連の師団は我が方の基準に適った装備を持っていないし、その戦術指揮はかなりお粗末なものである。だが彼らはそこにあり、たとえその1ダースが粉碎されたとしても、彼らは直ちに別の1ダースを配備する」

ソ連国防人民委員会（国防省）は開戦と同時に、新たな野戦軍を段階的に創設する作業を開始した。参謀本部は当面の作戦に対処するのに精一杯になり、7月23日、新兵力の生成は人民委員会と各軍管区に委託された。戦場になっていない軍管区では、基幹部隊に予備兵役を充当し、かつ現存の現役兵部隊を拡充するための組織を設立した。

こうして6月中に530万人の予備兵役が招集され、これによつてその後の動員が成功した。7月中には新編の13個、8月中には14個、9月には1個、10月には4個軍が形成された。

また、モスクワやレニングラードをはじめとする大都市では、その都市の共産党委員会が積極的に「民兵師団」を作り上げた。多くの市民が7月3日のスターリンの演説を聞いて志願したが、当然のごとく兵士としてのスタミナと訓練に欠けていた。だが、後には行

兵隊、工兵隊、通信隊、衛生隊が組み込まれ、正規の狙撃師団に改編されていった（ ）。

もちろん、戦前からあった師団と新たに動員された師団とは比較にならなかった。

緒戦の数週間で、訓練と装備の良好な師団の多くが失われ、後詰めの師団は政治将校と小銃の他は何も持っていなかった。さらに、これらの師団には部隊としての訓練をする時間がほとんどなく、いつもお粗末な行動しか取れなかった。

ドイツ軍はこのようなソ連軍の行動に、「敵は自分がすでに敗北していることを認識していない」との印象を抱いていた。

2・再建（後書き）

（ ） 狙撃師団に改編された民兵部隊の中には戦後まで生き延び、「親衛」に昇格したものもあった。

3・疎開

ソ連の重工業がドイツ軍に押収されることを防ぐために集団で移転したことによって、1941年の弾薬と武器の欠乏はさらにひどくなった。ドイツ軍侵攻以前は、ソ連の工業生産の製造工程のほとんどが国土の西側にあり、特にレニングラードとウクライナ東部の主要工業地帯に偏在していた。

「国家防衛委員会」は早くも6月24日には、これらの工場設備を東方に疎開させるための「避難評議会」を設置した。この大規模な疎開の調整業務は、副首相兼「国家工業計画委員会」議長ヴオズネSENSキーに任された。彼はスターリンに直言することも厭わぬ官僚の1人だった。そして、疎開の指揮を議長代理のコスイギンが執ることになった。

合計で1523工場うち軍備に関するもの1360場が、1941年7～11月までにウラル工業地帯、ヴォルガ河流域、シベリア、中央アジアへと移転した。この間に貨車100万両分の工場設備がバルト諸国、白ロシア、ウクライナから搬出された。

だが、機械類の移送作業は混乱を極め、移動した熟練工もわずかだった。厳しい冬の気候と永久凍土のために、建造物の建設にも時間が掛かった。やつのことで機械類の荷下ろしがなされ、暖房もない木造の倉庫の中で組み立てが始められた。作業はほとんど深夜まで行なわれ、梁に電灯をつるし、焚き火で暖と明るさを補った。

大多数の工場は目的地に到着してから6～8週間後には生産を開始し、ソ連の軍需生産力はほぼ1年をかけてその全力を発揮できるようになった。しかし1941年の戦闘では、ほとんど手持ちの兵器・弾薬で戦わねばならず、補充された戦車や大砲は塗料の上塗りなしで戦闘に投入された。

疎開はあらゆる方面で進められたが、共産党政治局は6月末に大きな政治的な意義を持つ決定を下した。ソヴィエトの「国体」であ

るレーニンの遺体を、赤の広場の「レーニン廟」から安全な場所に移動させるという決定である。

特別な防腐処理を施されたレーニンの遺体は7月3日の夜にモスクワを出発し、その4日後にモスクワから1600キロ離れたウラル山脈東方のチュメニに到着した。モスクワの「レーニン廟」は金属の足場で囲まれ、偽装用の防水シートで覆われた。

ソヴィエトの国民には何も知らされなかったが、レーニンの遺体は抗戦と勝利へのシンボルとしていまだ「レーニン廟」に安置されていると思っていた。

4・焦土命令

「避難評議会」は疎開にあらゆる最善の努力を費やしていたが、当然のことながらあらゆる資源を疎開させることは不可能であった。ソ連邦全体の石炭供給の約6割を生産していたドンバス炭田はその典型だった。

そこで、スターリンはドイツが我が物として利用することを防ぐために、構造上の理由で疎開できないあらゆる経済的施設を破壊することを命じたのである。

この「破壊命令」の対象の多くが、輸送機関と電力であった。部隊の輸送と物資の補給で必要とされる数の機関車のほかは徹底的に破壊され、多くの修理工場は爆破された。ドニエプル河の水力発電所はソ連軍が撤退する前に水門が開放され、残った労働者たちが水カタービンや発電機を破壊した。

ロシア本土でも同じような破壊活動が行われたが、その程度は地域によってかなりの差が生じた。特に白ロシアやウクライナ西部では、そもそも破壊を準備する時間さえ残されていなかった。

この「焦土作戦」はある程度まで成功し、ドイツの経済企画担当者は開戦前の推定を大きく変更せざるを得なくなった。この事態を受けて、ヒトラーは1941年度の目標を「追加的経済資源奪取のため」と定め、必然的に国防軍もこの目標に合わせて進撃することになるのである。

しかし、スターリンの「破壊命令」はここまでに留まらなかった。モスクワ防衛戦のさなかの11月17日、スターリンは「最高司令部指令第428号」と題した命令を發布したが、それはまさに国土を「焦土」へと変えるものであった。

「最前線から奥行き40～60キロの距離、また道路から左右20～30キロの距離に含まれるドイツ軍後方地域にあるすべての居住地を破壊し、これを焼き払うこと。居住地は爆破し焼き払うため、

ただちに右の行動範囲内へ航空兵力を投入し、大砲、迫撃砲、偵察隊、スキー部隊、火炎瓶などを装備したパルチザンを広い範囲で使用する事」

この命令に示された「居住地」には、まだ多くのソヴェエトの国民が生活していた。しかし、スターリンはドイツ軍に国土とその資源を明け渡さないことを至上目標に掲げていた。それに伴う犠牲を容赦なく自国民に要求したこの命令は、独裁者の戦争遂行に対する決意を如実に表している。

1・攻撃再開

ドイツ北方軍集団は6月28日、第4装甲集団の装甲部隊が西ドヴィナ河に2つの橋頭堡 ドヴィンスクとヤコブシュタットを確保したことにより、レニングラード攻略の第1段階を達成していた。しかし、第4装甲集団司令官ヘープナー上級大將は29日、装甲部隊にさらなる東進ではなく、進撃の一時停止と現状維持を命じた。援護のための歩兵部隊と燃料補給のトラックを待たためであった。

一方、ドヴィンスクを占領されたことにより、ソ連北西部正面軍司令官クズネツォフ大將は参謀長と共に30日付けで解任された（ ）。後任には、配下の第8軍司令官ソベンニコフ中将が昇格する形で就任した。その背後では、北部正面軍（レニングラード軍管区から改組）の各部隊が、レニングラードを防衛する準備を着々と進めていた。

7月2日、第16軍の第121歩兵師団（ランケーレ少將）が西ドヴィナ河に到達したことを受け、ヘープナーはレニングラードへの攻撃を再開するよう配下の装甲部隊に命令した。

このとき、ヘープナーは第41装甲軍団をドヴィンスクからレニングラードを最短距離で通じる街道上に直進するよう命じた。当然、待ち構えていると予想されるソ連軍の大兵力を牽制しながら、ペイプス湖に流れるヴェリカヤ河をプスコフとオストロフで渡河することが目標とされた。一方、第56装甲軍団は第41装甲軍団の南翼敵の防備が脆弱と思われる側面を援護しつつ、敵の背後に突進させる。最初の目標は、セベジとオポチカの占領であった。

7月4日、第41装甲軍団の第1装甲師団（キルヒナー中將）は南部からオストロフの市街地に突入し、ヴェリカヤ河に橋頭堡を確保することに成功した。その南東30キロの地点からは、第6装甲師団（ランドグラフ少將）がプスコフへの進撃を開始した。

ソベンニコフは、交通の要衝でもあるオストロフに第3戦車師団

（アンドレーエフ大佐）を急ぎよ投入した。7月5日、ソ連軍の戦車部隊は1日遅れで、KV1とKV2を先頭に北部からオストロフの奪還に乗り出した。

航空偵察で事前に把握していたとはいえ、第41装甲軍団はソ連軍の強力な重戦車による反撃を対戦車砲によって辛くも凌ぐ結果となった。7月9日、第36自動車化歩兵師団（オッテンバッツヒャー中將）は激しい市街戦の末、プスコフを占領した。

この事態を受けて、ソ連北西部正面軍は各地で突破されたヴェリカヤ河の防衛線を放棄して、ルガ河流域の新たな防衛線へ撤退した。ルガ河はレニングラードへの敵の進撃を食い止める最後の天然障害だった。この防衛線の構築には、約3万人のレニングラード市民が北部正面軍によって動員され、地雷の敷設、塹壕や対戦車壕造りに従事していた。

一方、レニングラードの背後にあるラドガ湖周辺では、ドイツの同盟国 枢軸国となったフィンランドが「継続戦争」、すなわち去年の「冬戦争」で失った領土を取り戻す戦いを始めていた。

6月29日、カレリア軍（ハインリクス中將）に所属する3個歩兵軍団がラドガ湖の北方から進撃を始め、ソ連第7軍（ゴレレンコ中將）の戦線を大きく押し返し、第168狙撃師団（ボンダレフ大佐）をラドガ湖畔のソルタヴァラで包囲することに成功した。

その1か月後には、ラドガ湖の西方からフィンランド軍の2個歩兵軍団がレニングラード北方の地峡に向かって進撃を開始し、国境を守るソ連第23軍（プシェンニコフ中將）の防衛線を果敢に突破していった。

1703年にピョートル大帝が築いたネヴァ河にまたがる壮麗な都市レニングラードはこのようにして、まるで万力で締めるようにじわりじわりと南北から包囲されようとしていた。

1 攻撃再開（後書き）

（ ）クズネツォーフはその後、7月24日に中央正面軍司令官に就任した。

2・ルガ攻防戦

順調な進撃を続けていた第41装甲軍団に対し、第56装甲軍団の進撃は想定に反してあまり芳しいものではなかった。その先の進路には密林と湿地が広がり、車両が通行できる満足な道路は存在しなかった。

7月4日の夜、マンシュタインはヘーブナーに対し、「第41装甲軍団から一部の部隊を支援のために割けないだろうか」と訴えた。しかし、このときラインハルトの装甲部隊はソ連軍のKV1とKV2の反撃を受け、燃料・弾薬ともに不足していた。

戦況を総合的に判断したヘーブナーはマンシュタインに対し、新たな命令を下した。その内容は、セベシ付近で防衛線を突破した第8装甲師団（ブランデンブルガー少将）を当初の目標であったオポチ力ではなく、オストロフの東方に進ませ、チュードヴォ付近でレニングレード・モスクワ街道を切断するというものだった。

一方、「最高司令部」は7月10日付けで北西部正面軍と北部正面軍を統括する「北西戦域司令部」を設立し、その司令官にヴォロシーロフ元帥が就任した。ヴォロシーロフは防衛の重点をルガ河上流に置き、第11軍にソリツイ付近で反撃に出るよう命じた（1）。

7月14日の早朝、第21戦車師団（ブーニン大佐）の支援を受けた第11軍は、交通の要衝チュードヴォに迫ろうとする第56装甲軍団に襲いかかった。不意の反撃によるパニックと兵力差を活かして、ソ連軍は第8装甲師団を包囲することに成功した。その西方では第3自動車化歩兵師団の背後を遮断しようとしていた。

この危機的状况に、マンシュタインは第8装甲師団にソリツイを放棄して南へ脱出するよう命じ、空軍に補給物資の空中投下を要請した。包囲戦は4日間に渡って続き、SS師団「髑髏」（クラインハイスターカンブ大将）が救援に到着したことで、第56装甲軍団

は壊滅の危機を脱した。

7月10日から進撃を始めた第41装甲軍団は、当初の計画通りレニングラード街道を直進してルガを突破しようとしていた。ソ連軍の反撃は微々たるもので、ラインハルトはソ連軍の背後から装甲部隊を進出させようとすると、先鋒から部隊が湿地帯に突入してしまい、走行が不可能であると報告がなされた。

ルガとその南方には、ソ連北西部正面軍副司令官ピャドイシエフ中將が機動集団を配置しており、ドイツ軍を湿地に囲まれた見通しの悪い森林へと誘い込んでいた。そして、この作戦を破壊工作の訓練を受けた共産党員のゲリラ部隊（4個大隊）が支援していた。ソ連軍の頑強な抵抗に遭遇した第41装甲軍団は12日、サポリエ（プリューサの線で停止に追い込まれてしまった）。

この戦況に、ヘーブナーは時間の浪費を避けるべく、作戦の見直しを始めた。航空偵察によって、ソ連軍はルガ河に沿ってルガの市街地を要塞化していたことが判明した。しかし、同様に北翼のルガ河下流には敵の兵力が少なく、防御陣地の構築もまだ進んでいないことを確認できた。

ヘーブナーはラインハルトに大規模な北への転進を行い、ルガ河下流のサブスクとポレチエを占領するよう命じた。攻勢の最中だった装甲部隊は150〜180キロの強行軍をただちに開始し、沼沢地に造られた粗末な「丸太道」を突進した。

7月14日、第1・第6装甲師団はルガ河下流に到達し、サブスクとポレチエにそれぞれ無防備な対岸に橋頭堡を築くことに成功した。この地域へのドイツ軍の襲来はまだ先だと考えていたヴォロシロフはショックを受け、ただちに投入可能な予備兵力をドイツ軍の橋頭堡に差し向けた。

このとき、ソ連軍の反撃の中核を担ったのは第2人民義勇兵師団（ウグリューモフ大佐）とレニングラード士官学校の学生で編成された2個中隊（ムーヒン中佐）であり、当然ながらその反撃はお粗末なものだった。ヴォロシロフ自ら前線に立って指揮を執るも、

ドイツ軍はルガ河の橋頭堡を守りきることに成功する（ 2 ）。

レニングラードへの最後の障害を攻略した第4装甲集団は士気も高まり、さらなる進撃命令を意気揚々と待っていた。しかし、ヒトラーが7月19日付で下した「総統指令第33号」は、第4装甲集団に対し第16・第18軍の歩兵部隊が追いつくまで「停止」するよう求めていた（ 3 ）。ヘープナーは上官である北方軍集団司令官レープ元帥に猛烈に抗議したが、ヒトラーの決定が覆ることは無かった。

2・ルガ攻防戦（後書き）

（１）ヴォロシーロフがルガ河上流に防御の重点を置いた背景には、スターリンの不安がある。スターリンは北からモスクワを攻められることを恐れていた。

（２）ヴォロシーロフが前線に立って指揮を執るのは、実に２０年ぶりのことだった。

（３）くわしくは後述する。

3・突破口の拡大

6月末、ソ連南西部正面軍はルーツク・ドウブノー帯で、ドイツ第1装甲集団に対する大規模な反撃を実施したが、失敗に終わってしまった。この結果を受けて、全部隊に対し撤退と再編を命じたキルポノスは6月30日、クレムリンから指令を受け取った。その内容は、旧国境線に設けられた「スターリン・ライン」まで撤退せよというものだった。

「スターリン・ライン」とは、1928年から段階的に構築されていたソ連西部の国境陣地帯のことであつた。正面幅50～150キロ、縦深30～50キロからなる「設堡地帯」に、機関銃座や対戦車砲、回転砲塔などを地形に応じて組み合わせた複合陣地が、フィンランドから黒海に至る後方地帯に設置されていた（1）。

キルポノスはこの命令に従い、プリピャチ沼沢地のコロステニからノヴォグラド・ヴォルィンスキー、シュペトフカに至る線で新防衛戦を形成しようと試みた。しかし、ルーツク・ドウブノから敗走した機械化軍団群は未だ混乱状態にあり、十分な防衛線を構築できるような余裕は無かつた。そこで、キルポノスは後方から人員をかき集めて機動集団を編成し、応急処置のような形で防衛線を作り上げた。

一方、ドイツ第1装甲集団の両翼では、第6軍と第17軍に所属する歩兵師団がそれぞれ掩護しながら、湿地と山岳が広がる地形を東方へと突進していた。北翼では、第6軍の第17軍団（キーニッツ大将）がソ連第5軍を掃討しながら、7月7日にはロブノ北方のサルヌイを占領して第1装甲集団の側面をほぼ確保した。

南翼では、第17軍が6月末によりやくソ連国境線を突破し、退却するソ連第6軍（ムズィチェンコ中将）の第6狙撃軍団（アレクセーエフ少将）と第26軍（コステンコ中将）の第8狙撃軍団（スネゴフ少将）をドニエストル河下流に向かって追撃していた。

6月29日、第17軍の第1山岳師団（ランツ少将）と第71歩兵師団（ハルトマン少将）が、ソ連第6軍に所属する第4機械化軍団（ヴラソフ少将）が守る旧ポーランドの都市リヴォフに攻撃を開始した。弱体化していた第4機械化軍団にはなす術もなく、翌日には同市を捨てて、第26軍とともに退却に転じた（2）。

この最中、カルパチア山脈で国境に面していた「中立国」ハンガリーが6月27日、ソ連に対して宣戦布告を行った。バルドシ首相はその前日、ハンガリー北東部の街カツシャウを「ソ連軍の爆撃機3機が空襲した」ことに対する報復処置を行うという内容の演説を行った（3）。

ハンガリーは当初から1940年に日独伊三国同盟に加盟するなど、ドイツ寄りの姿勢を示していたものの、国家元首のホルティはヒトラーにあまり好意を抱いていなかった。

しかし、ドイツ軍が緒戦の数日間で大きな戦果を上げたことにより、隣国のルーマニアが対ソ戦に参入すると表明した。この状況を受けて、バルドシ首相をはじめとする右派は「ドイツがルーマニアに対して好意的な感情を持つことは、ハンガリーにとって不利になるではないか」との懸念を示した。

ハンガリーとルーマニアは歴史的に何度も領土問題で対立してきた背景もあり、ホルティは対ソ宣戦布告を行うとする国会の決議を追認せざるを得なくなった。

そして、ソンバテルイ中将を指揮官とするハンガリー軍は7月9日、ドイツ南方軍集団の指揮下に置かれ、ソ連軍に対する軍事行動を開始した。

3・突破口の拡大（後書き）

（１）スターリンの政策転換や資材不足などが原因で、完成はしていなかった。

（２）所属していた第８戦車師団がルーツク＝ドゥブノの反撃に派遣されていた。

（３）「カッシャウに対するソ連空軍の爆撃」は、ハンガリー軍参謀本部とドイツ空軍が共謀して捏造した事件であると見られている。

4 ジトミール攻防戦

一方、ドイツ第1装甲集団の3個装甲軍団（北から第3・第48・第14）は6月末、ウクライナの首都キエフを最短距離で狙える地点としてジトミールを選び、シュペトフカから「スターリン・ライン」を突破してジトミールに迫ろうと進撃を再開していた。

7月4日、第48装甲軍団の第11装甲師団はシュペトフカの防御陣地に攻撃をしかけた。同地を守るのはソ連第16軍（ルーキン中将）の司令部を基幹とする機動集団（2個狙撃師団・1個機械化軍団の残存兵）のみで、瞬く間に防衛線を破られてしまった（1）。後方から第7狙撃軍団（ドブロセルドフ少将）の第196狙撃師団（クリコフ少将）が応援に駆けつけたが、翌日にはシュペトフカの市街地を占領されて東へと退却した。

7月7日、シュペトフカ東方で「スターリン・ライン」に到達した第11装甲師団は、第7狙撃軍団の残存部隊と凄まじい戦闘を繰り広げたが、ドイツ軍は高射砲連隊を前線に増派してソ連軍の薄い防衛線をようやく突破した。同日の夜には、要衝ベルディチエフを占領した。

7月8日、第48装甲軍団と連動して、第3装甲軍団も攻勢に乗り出した。第13・第14装甲師団は「スターリン・ライン」の北部にあるノヴォグラド・ヴォルィンスキーを攻撃し、同地を守るソ連軍の機動集団（ルーキン集団と同規模）を壊滅させた。市街地の南で防衛線を突破した第13装甲師団は翌日、ベルディチエフ北方35キロのジトミールを占領した。

このようにして、「スターリン・ライン」を2カ所で突破されたソ連南西部正面軍司令部は再び防衛計画の見直しを迫られる結果となった。しかし、「最高司令部」が7月10日付けで「南西戦域司令部」を設置したことにより、キルポノスの裁量権は狭められることになる。さらに、南西戦域司令官に就任したブジョンヌイは「騎

兵派」の長老で、キルポノスとは相性が合うはずもなかったが、そのような感情的な対立を吹き飛ばすような事態が出来していた。

7月10日、ジトミールを占領した第13装甲師団はさらなる東進を続け、ジトミールから100キロ東方を流れるイルペ二河の西岸に到達した。この進撃により、第5軍と第6軍の間に楔が打ち込まれ、その東岸は6月29日にキエフ外周陣地の第1期工事が完了していたものの、不完全な陣地がまばらに構築されているだけだった。

キエフからわずか16キロの地点にドイツ軍の戦車が現われたことに大きな衝撃を受けたブジョヌイと「評議員」フルシチョフは、直ちに大規模な反撃を行うようキルポノスに厳命した。南西部正面軍司令部では前日から準備を進めていた、ドイツ第1装甲集団に対する南北からの挟撃を第5・第6軍に命じた。

7月10日午前4時、第5軍に所属する第9・第19・第22機械化軍団が、ジトミールとノヴォグラド・ヴォルィンスキーの間からドイツ第3装甲軍団の背後に対して反撃を開始した。

ソ連軍の戦車部隊はどれも先のルツク・ドゥブノ戦で弱体化していたが、第3装甲軍団があまりにも進撃を急ぎすぎたため、隣接する第29軍団（オブストフェルダー大将）との間に大きな間隙が生まれていた。ソ連軍の戦車部隊はこの間隙に向かって突進した（2）。

7月14日、第9・第22機械化軍団はジトミールとノヴォグラド・ヴォルィンスキーを結ぶ街道に進出し、第3装甲軍団の第13・第14装甲師団が包囲される危機に直面した。この事態を受けて、第3装甲軍団長マッケンゼン大将は第25自動車化歩兵師団（クレースナー中将）を即座にソ連軍が決じ開けた間隙に急派した。

第25自動車化歩兵師団は空軍と砲兵の支援を受けながら、ジトミールの北西部でソ連軍の波状攻撃を何度も撃退させることに成功した。さらに、SS自動車化歩兵師団「アドルフ・ヒトラー親衛隊旗（LAH）」（ディートリヒ大将）が後方から増援に駆けつける

と、戦局はドイツ軍に有利に転じた。ソ連第5軍の反撃はまもなく頓挫させられた。

一方、第6軍では第4・第15機械化軍団に加えて、南部の第18軍（スミルノフ中将）から派遣された第16機械化軍団が7月1日からドイツ第48装甲軍団に対する反撃を開始していた（3）。

ジトミール南方から出撃したソ連軍の戦車部隊は弱体化していたにも関わらず、ドイツ第11装甲師団をベルディチエフで包囲した。この包囲戦は5日間に渡って続けられたが、第16装甲師団（フーベ少将）がソ連軍に反撃しつつ、第16自動車化歩兵師団（ヘンリーキ少将）と第75歩兵師団（ハンメル中将）が孤立した第11装甲師団との連絡を回復することに成功した。

結局、ソ連南西部正面軍によるジトミール周辺での反撃作戦は、2週間前のルーツク・ドゥブノでの反撃と同様に、自軍の大きな損害を伴って失敗に終わってしまった。しかし、この反撃もまた北西部正面軍の場合と同じく、ヒトラーには重大な脅威だと感じ取らせることになる。

7月19日付の「総統指令第33号」において、ヒトラーは第1装甲集団をキエフではなく、ドニエプル河の下流へと進撃させるよう南方軍集団司令部に命じたのである。

4 ジトミール攻防戦（後書き）

（ 1 ）後に第16軍は再編されて、スモレンスクの防衛を担当することになる（第4章）。

（ 2 ）3個機械化軍団を合わせても稼動戦車台数は、120両足らずだった。（当時の1個機械化軍団が所有する戦車台数は、平均で491両）

（ 3 ）第18軍は南部正面軍に所属（第7章参照）

1・広がりすぎたドイツ軍

1940年11～12月にかけて、ドイツ陸軍参謀本部第1部長パウルス中将は兵棋演習を繰り返しながら、「バルバロッサ作戦」の「日程表」を作成した。それによると、ドイツ軍は開戦から20日目（7月11日）で作戦の「第1段階」ドニエプル河以西でのソ連軍の殲滅を終了し、20日間そこで部隊の休養と再編を行い、40日目（7月31日）に第2段階の作戦を開始する予定になっていた。

しかし、実際には7月11日の段階では、ドイツ軍には作戦の停止や部隊の再編を行う余裕は全く無かった。中央軍集団はスモレンスク周辺、北方軍集団はソリツイで装甲部隊が包囲され、南方軍集団はジトミール攻防戦でソ連軍の反撃に忙殺されていた。

この戦況を受けて、ヒトラーは7月19日付けで「総統指令第33号」を発令した。

「次期作戦の目的は、遮断と撃破である。ロシア内陸深く退却せんとする相当規模の敵部隊を阻止し、徹底的に殲滅する。このため、計画は次の通りとする。

レニングラードへの進撃は、第18軍が第4装甲集団と接触し連絡が取れて、さらに広範な東翼が第16軍によって十分に掩護されてから再開する。

中央軍集団は多く残存する敵の孤立陣地を壊滅し、後方連絡線を確立した上で、歩兵部隊をもってモスクワへ進撃する。さらにモスクワとレニングラード間の交通線を遮断し、北方軍集団によるレニングラード進撃の南翼を掩護する。

南東正面では、集中攻撃により、敵の第6軍および第12軍をドニエプル河の西に布陣する間に撃破する。最も重要な目標はこれである。中央軍集団の南翼と南方軍集団の北翼で協同攻撃を実施し、敵の第5軍を速やかに撃破し、殲滅する」

すなわち、ヒトラーは作戦の「第1段階」を着実に進むことで、次の段階に移行しようという楽観的な見通しに立っていた。7月23日には「第33号追加指令」を発令し、第2段階で中央軍集団から南方軍集団に第1装甲集団、北方軍集団に第3装甲集団を移動させて、成功しつつある両方面での攻撃の支援に当たるように命じた。しかし、7月中旬に入ると、ソ連軍はスモレンスクの全周で波状反撃を開始し、中央軍集団の諸部隊を大きく痛めつけた。この時になって、ドイツ陸軍参謀本部はようやく自分たちの計画の大きさと情勢の変化に気づき始め、ヒトラーに「バルバロッサ作戦」全体の見直しを検討するよう提案した。

「バルバロッサ」作戦の第2段階を開始する「予定」の前日に当たる7月30日、ヒトラーは「総統指令第34号」を発令して、中央軍集団の進撃停止を命令した。

「ここ数日の状況変化、すなわち中央軍集団の正面および両翼にみられる強力な敵部隊の出現、補給状態、第2および第3装甲集団が必要とする10日間ほどの戦力回復のため、7月19日付指令第33号および7月23日付追加で示した爾後の任務と目的達成は、当面延期する必要がある」

この指令の背景には「バルバロッサ作戦」の見直しよりも、ある致命的な問題が深く関与していた。この時、ドイツ軍は緒戦での大進撃の成功のために、兵站組織がまったく機能しなくなっていたのである。

2・電撃戦の「アキレス腱」

ドイツ軍の全般的な兵站業務は、陸軍参謀本部の兵站總監部が担当していたが、「バルバロッサ作戦」の発動によってその業務が膨大なものになることが予想されたため、北方・中央・南方の各軍集団に付随する形で「現地事務所」という在外機関を開設した。

各軍集団の「現地事務所」は6月22日の開戦から、輸送トラックを用いて前線部隊に補給物資を送り届けようと業務を始めたが、自分たちの見通しの甘さとその任務の困難さに早くも直面することになる。

ソヴィエト連邦の広大な領土の中で、全天候で使用可能な舗装された道路は全長で約6万4千キロしかなかった。でこぼこした悪路が果てしなく続き、雨が降れば沼地と化して通行不能となる。そのつど、工兵隊が白樺の幹を渡して専用の「丸太道」を作らねばならなくなった。輸送トラックや進撃する自動車や装甲車でさえも速度を上げて走ることが出来ず、事前の計算より1・5倍から2倍の燃料を消費していた。

その結果、ドイツ軍は侵攻開始から1ヶ月と経たない7月中旬には、補給用トラックの3分の1が故障などによって失われた。さらには「電撃戦」の主役である装甲師団の戦車や装甲車は未舗装の道路を走行することを想定しておらず、舞い上がる土埃を連日吸い続けたエンジンは次々と故障し、各師団は次第に「痩せ細く」なつていった。南方軍集団司令官ルントシュテット元帥は手紙で妻にこう書き記している。

「ロシアの茫漠たる広がり、私たちは呑み込まれている」

一方、これらのトラックによる物資輸送と並行して、国防軍輸送局が鉄道による物資補給路を構築しようとしていたが、この時にある重大な問題が発覚した。それは、ドイツとソ連の鉄道では線路の間隔（ゲージ）が異なるという事実であった。

西欧式の「標準軌」は間隔が1・435メートルだったが、ソ連では1・524メートルの「広軌」が採用されていた。後者の方が約9センチ広いために、当然のことながらドイツ製の機関車や貨車はそのまま走行できない。このため、国防軍輸送局は鉄道工作隊を編成してゲージ変換作業を担当させたが、その作業は遅々として進まなかった。

また、ソ連の路線網はその多くが「接続」せずに「交差」している（直接の乗り入れが不可能で、貨車から貨車へと積荷を載せ替えずなくてはならない）という貧弱さを露呈し、物資の積み替え駅では深刻な渋滞が発生していた。7月31日の時点で、3つの軍集団は21万3301人の人的損害を出していたが、鉄道網の不備によって前線に補充されたのは、たったの4万7千人だった（）。この状況は、燃料や弾薬の補充でも発生していたため、進撃中の装甲師団はしばしば空軍の空中投下に物資補給を頼った。

そして、兵站における最も深刻な問題は、優先順位のあいまいさにあった。ドイツ軍の補給は陸軍参謀本部（トラック）、国防軍輸送局（鉄道）という2つの部署が担当し、その権限は空軍・海軍までは及んでいなかった。そのため「バルバロッサ作戦」開始直後から、陸海空の三軍の中で物資の運行優先権をめぐる衝突が頻発していた。さらには、陸軍内部でも装甲師団と歩兵師団の間で摩擦が発生し、北方軍集団がルガ河前面で停止した理由もここにあった。

このような状況にあつて、ヒトラーは達成できる目標を探し始めた。これはドイツ軍が依然として優位にあるという全世界へのプロパガンダとしての意味があつた。彼が特に気にしていたのは、ソ連の工業・穀倉地帯の奪取であり、また貴重なルーマニアの油田への爆撃機の航続距離外までソ連軍を追いやることであつた。

2・電撃戦の「アキレス腱」(後書き)

() 一方で、ソ連軍は海軍も含めて9月30日の時点で、総計212万9677人の人的損害を出しており、これは戦前の軍の全兵力の半分以上が犠牲になったことを示している。

3・参戦

1940年6月28日、ソ連邦は「独ソ不可侵条約」に付随した「独ソ境界ならびに友好条約」に基づき、ルーマニアからベッサラビア（モルタヴィア）と北部ブコヴィナ地域を「ソ連の勢力範囲に含まれるべき」として割譲し、それぞれオデッサ軍管区とキエフ軍管区に編入させた。この5万平方キロの領土には、370万人のルーマニア市民が居住していた。

同年9月4日、ルーマニア首相に就任したイオン・アントネスク大將は11月に「日独伊三国同盟」に加盟し、親独路線を展開した。親ナチ派のアントネスクはハンガリーの場合と異なり、独ソ開戦の暁にはフィンランドと同様に「失地回復のための参戦」を行う固い決意をしていた。

一方、ドイツにとってルーマニアは、当時のヨーロッパの中では最も重要な同盟国とみなしていた。なぜなら、ドイツは戦役で消費する石油量の約7割を、ルーマニア領内のプロエシユチ油田に依存しており、国防軍の戦争遂行には不可欠な資源だったのである。ドイツ軍はこの油田を防衛するという名目で、1940年11月からルーマニア政府の承認を得て段階的に部隊を進駐させていた。

1941年6月の時点では、ドイツ第11軍に所属する7個師団が国境となるブルート河西岸とプロエシユチ油田の周辺に配置されていた。「バルバロッサ作戦」において、ルーマニア軍は「補助任務に就く」とされていたが、実際にヒトラーから公式なドイツ軍のソ連侵攻を告知されたのは、開戦10日前の6月11日のことだった。アントネスクは外交上、非礼な扱いを受けたわけだが、ソ連侵攻に参戦するという決意を変えることは無かった。

開戦から11日目の7月2日、ルーマニア領内に進駐するドイツ第11軍とルーマニア第3軍（ドウミトレスク中將）、第4軍（チユペルカ中將）の合同部隊がソ連侵攻「ミューンヘン作戦」を開始

した。第11軍はベッサラビア北部、ルーマニア第3軍はカルパチア山脈の北部ブコヴィナ、ルーマニア第4軍はベッサラビア中部を突進してドニエストル河下流を第1目標とされた。

一方、ルーマニアと国境を接するプルト河東岸 ソ連軍では、6月22日の開戦に伴って、オデッサ軍管区が南部正面軍に改組された。正面軍司令官にはモスクワ軍管区からテュレーネフ上級大將が転任することが決定され、それまで同軍管区を率いていたチエレヴィチエンコ大將は配下の第9軍司令官に任命された。

6月24日、モスクワからテュレーネフがヴィンニツァに置かれた南部正面軍司令部に到着すると、その頃には新たに第18軍が編成され、第16機械化軍団（ソコロフ少將）をはじめとする予備兵力が集結していた。

6月30日、ドイツ第54軍団（ハンゼン大將）の第170歩兵師団（ヴィットケ少將）が国境のプルト河にかかる橋を奇襲攻撃で占領し、対岸に橋頭堡を築いた。ソ連軍は2日間に渡ってこの橋頭堡を潰そうと反撃したが、ドイツ軍は多くの損害を被りながらも、とうにか橋頭堡を確保することに成功した。

7月2日、第54軍団の後に続いてプルト河の上流からルーマニア第3軍が突撃艇に分乗して東岸へと進出し、その3日後には山岳兵軍団の第1・第4山岳兵旅団がブコヴィナの中心都市チエルノフツィを奪回し、早くも「ミュンヘン作戦」の第1目標を達成した。

この後、ルーマニア第3軍は7月10日までに第11軍の指揮下に入り、国境からソ連領内を約150～200キロ進出していた。17日には、ドニエストル河上流への渡河作戦を開始した。

4・ウマーニ包囲戦

一方、ブルート河南方に構えていたルーマニア第4軍も攻勢に転じ、ベッサラビア南部へと突進した。16日には、ベッサラビアの中心都市キシニョフを奪回し、黒海に面した重要な港湾都市であるオデッサを占領しようとしていた。

この事態を受けて、テュレーネフは第9軍に対し、第2機械化軍団（ノヴォセリスキー中将）と第48狙撃軍団（マリノフスキー少将）を中核とした機動集団を編成して、キシニョフを奪回せよと命じた。しかし、「最高司令部」から支援のための予備兵力をジトミールで奮戦する南西部正面軍に譲渡するよう命じられ、テュレーネフは反撃を中止せざるを得なくなった。

7月18日、ルーマニア第4軍はオデッサを包囲することに成功した。ベッサラビアから東に退却していた第9軍から3個狙撃師団（第25・第51・第150）と若干の支援部隊が切り離され、これらの部隊は「最高司令部」の命令で、「独立沿海軍」（ソフロノフ中将）として再編され、8月5日からオデッサの防衛を命じられた。

さらに、ルーマニア軍の進撃が一定の成功を収めたことで、ソ連南西部正面軍はリヴォフで突出していた戦線を縮小せざるを得なくなった。南翼の第6・第12軍はヴィンニツァ、南部正面軍の第18軍もウマーニの南方まで後退した。

一方、ドイツ南方軍集団は7月19日付の「総統指令第33号」に基づき、攻勢の主軸をキエフ正面からドニエプル河下流へと差し向けた。ベルディチェフ周辺から第48装甲軍団が南進を開始し、リヴォフから東方に向かっていた第17軍とともに、ソ連第6・第12軍の退路を切断しようとしていた。

7月16日、第17軍はヴィンニツァ付近で退却中の第6・第12軍を包囲しようとしたが、歩兵部隊だけではソ連軍を捕捉する

ことが出来ず、失敗に終わった。度重なる交戦に疲弊しながら、ソ連軍の残存部隊はヴィンニツァ南東のウマーニへと脱出した。

7月23日、ベラヤ・ツエルコフイを占領した第14装甲軍団（グィッテルスハイム大将）はウマーニの東方を流れるシニユハ河の東岸に北から進出し、徒歩で退却中のソ連軍の前方を遮断することに成功した。第6・第12軍は南方へと脱出しようとしたが、ドイツ軍の装甲部隊が持つスピードに追いつかれ、ウマーニ南東で包囲されてしまった。

7月30日、ドイツ第6軍の第44軍団（コツホ大将）がウマーニの市街地を占領し、その3日後には第14装甲軍団の第9装甲師団（フービツキ中将）と第17軍の第1山岳師団が、シニユハ河のトロヤンカで合流を果たした。南方軍集団による最初の包囲網が形成されたのである。

退却中の第6・第12軍がウマーニ周辺で包囲されたことを知った南西部正面軍司令官キルポノス大將は、8月7～8日にかけて、ドニエプル河のカーネフ南西で第26軍の残存部隊による反撃を実施した。これに対して、ドイツ南方軍集団は第17軍の第4軍団（シュヴェドラー大將）をドニエプル河西岸に派遣し、ソ連軍の反撃を頓挫させることに成功した。

ウマーニ包囲網はぞくぞくと到着する第17軍の歩兵部隊によって強化され、空からは第4航空艦隊の第5航空軍団に所属する爆撃機が幾度も空襲を行い、混乱したソ連第6・第12軍の残存部隊を殲滅していった。また、同時期にベッサラビア北部から退却していたソ連第18軍もドイツ第11・第17軍の挟撃を受けて壊滅してしまっ

た。ウマーニ包囲戦は8月8日までにほぼ終了し、その5日後には最後の抵抗拠点に潜むソ連軍が投降した。ソ連軍は第6軍司令官ムズィチエンコ中將と第12軍司令官ボネデーリン少將を含む10万3000人の兵員が捕虜となり、戦車317両、火炮1100門が鹵獲・破壊された。南部正面軍は第9軍をオデッサで拘束され、第1

8軍をウマーニで壊滅させられ、組織的な防衛を行う術を失ってしまった。

ヒトラーはこの結果を受けて、キエフ以南のドニエプル河西岸におけるソ連軍の防衛線に大穴を開けたことに満足し、「南部に攻勢の重点を置く」という自らの戦略に過剰な自信を抱くことになった。一方、同時期にスモレンスク攻防戦を終了させた中央軍集団と陸軍総司令部はヒトラーとは異なる思惑を抱いていた。そして、これから約1ヶ月に渡って、この両者の思惑が陸軍内部に大きな波紋を広げていくことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472w/>

巨人たちの戦争 第2部：対立

2011年11月26日19時04分発行